

文化財建造物におけるアライグマなどの獣害を体験して

中村 覚 祐 （聖護院執事長）

峰定寺は京都市左京区花背原地町にある山岳寺院で、山紫水明幽邃の地にあり山号を大悲山（746/崧）という。古くは大日山寺と称したが、開山観空上人西念は鳥羽法皇のご帰依を受けられ、久寿元年 2 月（1154）法皇の勅願により三間四面の本堂が建立されたのが、大悲山峰定寺の始まりである。

杉の巨木が林立する参道を進むとほどなく仁王門（重文）にたどり着く。

仁王門は大門とも称されるが、峰定寺ではこの仁王門を「発心門」と称している。正面上部に掲げられている発心門の額は鳥羽法皇の筆によるものであり、棟札には平治元年（1159）鳥羽上皇の御願により平清盛雑掌、少納言入道信西を奉行として建てられた事が記されている。建築様式から見て貞和の再建であろうと推測されている。



仁王門は三間一戸八脚門入母屋造り。内部は組入天井を張り、斗栱は出三斗、中備は間斗束の簡素な意匠で、屋根は柿葺の山寺らしい落ち着いた姿である。

仁王門の前にある樹齢 800 年を超える大木の高野槇より仁王門を超え、四百二十段ほどの石段を登ると鐘楼堂に着き、さらに石段を登ると漸く懸崖に建つ本堂に到着する。

本堂のご本尊は鳥羽法皇の念持仏である十一面観世音菩薩像を御下賜され、さらに法皇は本尊左右の脇侍像として二童子付き不動明王立像、毘沙門天立像を奉納された。

その後、本堂は五間四面四柱屋根柿葺となり、崖に臨む舞台懸崖造りとなった。右回廊の奥にある一間四方の供水所の閼伽井屋は、単層唐破風造、板葺きの建築で現存する日本最古の閼伽井屋と言われている。



◎文化財に対するアライグマ等の獣害

平成 20 年（2008）の京都仏教会理事評議委員会において、東山から稻荷山近郊の神社仏閣へのアライグマによる建造物への被害についての現況報告がなされた。

京都仏教会ではこの報告に基づき、アライグマの生態系研究では第一人者である関西野生

資料 1 2

生物研究所の川道美恵子氏を招聘し、社寺建造物へのアライグマ被害の現状について詳細な説明を受け文化財を所有する管理者としてはその獣害の深刻さに驚かされた。

アライグマによる被害として ①社寺建造物への侵入と破壊 ②生態系の変化
③文化財管理者及びその家族等への病気伝播への危険性 が指摘された。

【仁王門における被害状況】

平成 20 年（2008）12 月川道先生によって峰定寺にて現地調査が行われ、仁王門八脚門の柱すべにアライグマの爪痕が確認された。特に正面裏北西角柱、正面裏中央北柱では大変多くの爪痕が確認され、天井裏への侵入経路であることが確認された。

内部の組入天井部分については、10 ケ所ほど天井板が突き上げられ、数箇所は天井裏が丸見えの状態になっていた。また化粧垂木部分の化粧野地板も開けられ一部は地面に落下していた。これほど迄にアライグマによる被害が発生していたことに驚いた。



【本堂における被害状況】

回廊部分も仁王門と同様に、化粧野地板が外されていた。また、本堂北面側では間斗束（けんとうつか）の傍にアライグマによるものと思われる穴が一箇所開けられていた。

平成 21 年拝観業務再開の為に、4 月初旬本堂内に入ると内々陣の須弥壇（平安初期）のまわりに厨子屋根の檜皮の残片や土壁を爪で削った土が一面に散乱していた。

須弥壇の屋根上ではアライグマが棲みついた形跡があり、さらに大量の糞尿が確認され、屋根の一部を損壊させていた。

アライグマの生息を確認し、川道先生の指導の下、アライグマの捕獲を試み、足掛け 3 ケ年にアライグマを 1 匹、ハクビシンを 5 匹捕獲することに成功した。

また峰定寺は自然環境保全地域（昭和 60 年 3 月）に指定されたが、鹿の大量発生による食害により、府自然環境保全課が作指定する希少植物も激減し、鹿の食害にも苦慮している。

